

1 慢性前立腺炎に対する漢方治療の検討

広島大学大学院 医系科学研究科 腎泌尿器科学

北野 弘之、日向 信之

【背景と目的】

慢性前立腺炎の治療において、臨床的な特徴に基づくUPOINT (S)分類が推奨されている。この分類は、患者の症状を6つの項目に分類し、それぞれに対応した治療を組み合わせることで、症状の改善を図る。しかし、完全な寛解が得られない症例を多く経験する。本研究では、UPOINT分類に基づく治療を受けた患者のうち、漢方薬が治療効果に与える影響を検証した。

【方法】

慢性前立腺炎患者に対し、UPOINT分類に基づいた治療を行った後、症状が残存する患者に対して漢方薬を使用し、その治療効果を後方視的に解析した。

【結果】

研究対象は68例で、そのうち漢方薬を投与したのは34例であった。使用した漢方薬は9種類で、治療前に陰茎の痛みを自覚し、前立腺に圧痛が認められ、慢性前立腺炎問診表の総合スコアおよび痛みの領域スコアが高かったことが示された ($p=0.004$, 0.005 , 0.02 , 0.002)。漢方薬投与群では痛みの領域スコアが有意に低下し ($p<0.01$)、特に陰嚢に痛みを有する患者、BMIが23.1以上の患者、前立腺体積が26ml以上の患者、および前立腺に圧痛を有する患者では、痛みの領域スコアの低下が有意であった ($p<0.01$, $p<0.01$, $p<0.02$, $p<0.03$)。これらの特徴が、漢方治療による痛みの改善において独立した予測因子として特定された ($p=0.0016$, $p<0.001$)。

【結語】

UPOINT分類に基づく慢性前立腺炎治療で症状が完全に改善しない場合において、前立腺に圧痛を有する患者や陰嚢に痛みを有する患者に対して漢方治療が有効である可能性が示唆された。